

# 学生間における AI ガバナンスの認知について

孫 武

日本大学 法学部

キーワード：AI, AI ガバナンス, AI 教育, デジタルリテラシー, 学生意識

## 1 はじめに

近年、人工知能 (AI) 技術の急速な発展に伴い、その社会的影響はますます大きくなっている。AI は医療、教育、ビジネス、公共サービスなど、多くの分野で革新をもたらし、人々の生活や仕事の質を向上させている。例えば、医療分野では、AI による診断支援システムが画像診断を補助し、早期の病気発見を可能にしている。具体的には、CT スキャンや MRI の画像を AI が解析し、異常を自動的に検出することで、医師の診断精度が向上し、患者の早期治療に繋がっている。この技術により、肺癌や脳卒中の初期段階での検出率が飛躍的に向上し、患者の生存率が大幅に改善されている【1】。教育分野では、AI を用いたパーソナライズド学習が進展している。例えば、リクルートの「スタディサプリ」は、AI が学生の学習進捗や理解度をリアルタイムで分析し、それに基づいて最適な学習プランを提供するオンライン学習プラットフォームである。これにより、学生は自分のペースで効率的に学習を進めることが可能となり、特に理解の遅れている分野に重点的に取り組むことができる【2】。さらに、AI を活用した自動採点システムやインタラクティブな教材も開発されており、教師の負担軽減と教育の質の向上に寄与している【3】。このような技術の進歩は社会に多大な恩恵をもたらす一方で、倫理的、法的、社会的な課題も浮き彫りにしている。例えば、AI 技術の利用が拡大するにつれ、個人のプライバシーが侵害されるリスクが高まっている。AI システムは大量のデータを収集・解析するため、個人情報が入り込んでいるデータが SNS の投稿データやウェアラブルデバイスの健康データが AI によって解析され、個人の行動パターンや健康

状態が無断で第三者に利用されるリスクが指摘されている【4】。また、AI システムが意思決定に用いるアルゴリズムが不透明であるため、その公平性や信頼性に対する懸念も生じている。特に、AI アルゴリズムにおけるバイアス問題は、特定のグループに対する差別的な結果をもたらす可能性があり、社会的な不平等を助長するリスクがある【5】。例えば、採用プロセスにおける AI の利用が、人種や性別に基づく不平等な選考結果を生じさせる可能性がある。さらに、AI 技術が急速に進化する中で、既存の法規制が追いついていないため、新たな法的課題も浮上している。例えば、自動運転車の事故責任や、AI 生成コンテンツの著作権問題など、法律の未整備な分野が多く存在する。これらの課題に対応するためには、法律や規制の整備が急務である【6】。

## 2 目的・研究内容

本論文の目的は、AI ガバナンスとその実際の活用についての現状を明らかにし、特に学生を対象としたアンケート調査を通じて、若年層の認識や意識を探ることである。学生は将来の社会を担う重要な存在であり、彼らの意識や理解度は今後の AI ガバナンスの形成に大きな影響を与えると考えられる。本研究では、以下の問いに答えることを目指す。

- ・ 学生はどのように AI 技術を日常生活や学習に活用しているのか？
- ・ 学生は AI ガバナンスについてどの程度認識しているのか？
- ・ 学生は AI 技術の利用においてどのような倫理的懸念を持っているのか？

これらの問いに対する回答を得るために、

Google フォームによるアンケート調査を実施し、得られたデータを分析する。その結果を基に、AI ガバナンスの現状と課題を整理し、今後の方向性について考察する。本論文が、AI 技術の健全な発展と社会的受容を促進する一助となることを期待する

### 3 AI ガバナンスの概要

AI ガバナンスとは、AI の開発、運用、利用における倫理的、法的、社会的な側面を管理する枠組みを指す。これには、AI 技術がもたらす潜在的なリスクを最小限に抑え、その恩恵を最大限に引き出すための規範やガイドラインが含まれる。AI ガバナンスの重要性は、AI の利用が拡大する中でますます増しており、各国や国際機関が積極的に取り組んでいる。まず、AI ガバナンスの基本的な概念として、透明性、説明責任、倫理性が挙げられる。透明性とは、AI システムがどのように動作するかを理解可能にすることであり、利用者や社会全体がその仕組みや決定プロセスを把握できるようにすることを意味する。説明責任は、AI システムの開発者や運用者が、そのシステムによる決定や行動について説明し、責任を負うことを求めるものである。倫理性は、AI 技術の開発と利用が社会的に受け入れられる価値観や規範に基づいて行われることを保証するものである。日本においても、AI 技術の利用が拡大する中で、AI ガバナンスの重要性がますます強調されている。2022 年 4 月に全面執行された改正個人情報保護法 (APPI) がその代表例であり、AI システムやビックデータによる個人データの取扱いに厳格な規制を設けている【7】。経済産業省は「AI ガイドライン」を策定し、AI の開発や運用における倫理的課題に対処するための具体的な指針を提供している。このガイドラインは、AI システムの透明性の確保、データの品質管理、バイアスの除去、プライバシー保護などを重視しており、AI 技術の健全な発展を支える重要な役割を果たしている【8】また、企業レベルでも AI の公正性や透明性を確保するための取り組みが進んでいる。例えば、ソフトバンクは、AI 技術を用いたサービスにおいて透明性を確保するために、アルゴリズム監査や倫理的ガイドラ

インの策定を行っている【9】。AI システムの設計段階から倫理的配慮を取り入れ、定期的な監査を通じてアルゴリズムの公平性と透明性を検証している。これにより、利用者の信頼を確保し、社会的受容を促進している。これらの取り組みは、技術の進展と社会的影響のバランスを取る上で重要なステップとなっている。国際的には欧州連合 (EU) の一般データ保護規則 (GDPR) がその代表例である。GDPR は、個人データの取扱いに厳格な規制を設けており、AI システムが個人データをどのように使用するかについての透明性と説明責任を求めている【10】。また、米国の一部の州では、AI 技術の倫理的使用を促進するための法律が制定されており、例えば、ニューヨーク州は AI システムによる雇用選考に関する透明性と公平性を確保するための規制を導入している【11】。AI ガバナンスの課題としては、技術の急速な進展に法規制が追いついていない点が挙げられる。AI 技術は日々進化しており、それに対応するための規範やガイドラインの整備が求められている。また、国際的な協調の必要性も高まっており、各国が共通の基準を持って AI ガバナンスに取り組むことが重要である。本章では、AI ガバナンスの基本的な概念と現状について概説し、次章では、具体的な活用事例を通じて AI 技術がどのように社会に影響を与えているかを詳述する。

### 4 身近な AI サービスの事例

AI 技術は多様な分野で活用され、その影響は広範に及んでいる。以下では、学生間での利用率が高いと想定される生成 AI、スマートスピーカー、AI 翻訳の各分野における具体的な活用事例を紹介し、それぞれの利点と課題について考察する。

まず、生成 AI 技術の事例としては、OpenAI の ChatGPT や Google の Gemini、Stability AI の Stable Diffusion などが挙げられる。これらは自然言語処理を用いて人間のような対話を実現するもので、ユーザーの質問に応じて情報を提供したり、創作的な文章を生成したりすることができる。例えば、ブログ記事の執筆や SNS の投稿、メールの返信など、日常的な文章作成を効率化するために広く利用されている。また、Stable Diffusion のような画

像生成 AI は、使用者が提供したプロンプト（指示文などを指す）や写真データをもとに画像を生成することができ、デジタルアートの作成や写真編集の分野で活用されている。しかし、生成 AI の利用には、生成されたコンテンツの品質管理や著作権に関する問題が課題として存在する。次に、スマートスピーカーの分野では、Amazon Echo や Google Home などの AI 搭載デバイスが広く利用されている。これらのデバイスは、音声認識技術を用いてユーザーの音声指示に応答し、音楽の再生、ニュースの提供、家電の操作など多様な機能を提供する。例えば、ユーザーが「Alexa、今日の天気を教えて」と尋ねると、インターネットから最新の天気情報を取得し、音声で回答する。また、家庭内の照明やエアコンなどの家電製品を音声で操作することも可能であり、手が離せない状況でも便利に利用できる。しかし、これらのデバイスの利用には、プライバシー保護やデータセキュリティの懸念があり、ユーザーの音声データがどのように収集され、利用されるかについての透明性が求められる。AI 翻訳の分野では、Google 翻訳や DeepL などのサービスが広く利用されている。これらの AI 翻訳サービスは、高度な機械学習アルゴリズムを用いて、多言語間でのテキスト翻訳を高精度に行うことができる。旅行の際には、現地の言葉が分からない状況でもスマートフォンを使ってリアルタイムで翻訳し、コミュニケーションを円滑にするために活用されている。さらに、教育分野でも AI 翻訳は重要な役割を果たしており、学術論文の翻訳や外国語の教材の理解を助けるツールとして使用されている【12】。しかし、AI 翻訳には微妙なニュアンスや文化的背景を正確に伝えることが難しい場合があり、翻訳結果の質を向上させるための継続的な改善が必要である。これらの事例からも分かるように、日本では AI 技術が日常生活の様々な場面で利用されており、生活の質の向上と効率化が進んでいる。生成 AI、スマートスピーカー、AI 翻訳などの技術は、特に個々の生活の中での利便性を高めている。しかし、その活用には技術的な課題だけでなく、倫理的、法的な課題も多く存在する。次章では、学生を対象としたアンケート調査を通じて、若年層の AI 技

術に対する認識や意識を明らかにし、AI ガバナンスの現状と課題についてさらに考察する。

## 5 学生を対象としたアンケート調査

AI ガバナンスとその実際の活用に関する若年層の認識や意識を明らかにするため、大学生を対象としたアンケート調査を実施した。本章では、アンケート調査の目的、調査方法、アンケート項目の設計、調査対象者の属性について詳述する。

### 5.1 アンケート調査の目的

本調査の目的は、学生が AI 技術および AI ガバナンスに対してどのような認識を持ち、どの程度の理解をしているかを明らかにすることである。特に、AI 技術の利用経験、AI ガバナンスに対する認識、AI 技術に関連する倫理的懸念について調査することで、将来の AI 技術の発展とガバナンスのあり方に関する洞察を得ることを目指している。

### 5.2 調査方法

アンケート調査は、オンライン形式で実施し、大学生を対象に無作為に選出した。調査期間は 2024 年 5 月から 6 月の 1 ヶ月間で、Google フォームを使用して質問を配布し、回答を収集した。調査参加者には事前に研究の目的とプライバシー保護について説明し、同意を得た上で回答を求めた。

### 5.3 調査方法

アンケート項目は以下の 3 セクションに分けて設計した。

#### [基本情報]

- 学年
- 性別
- 専攻
- AI の認識と利用状況

#### [AI 技術に対する認識]

- AI の使用頻度
- どのような場面で AI を使いますか？
- どのような AI 使っていますか？（複数回答可）
- AI を使わない理由を教えてください（複数回答可）

#### [AI ガバナンス]

- AI ガバナンスという概念に関する認知
- AI ガバナンスで重視すること（複数回答可）
- AI が社会に与える影響についてどのように感じていますか？

- AI ガバナンスの取り組みを強化するためにどのような取り組みが必要だと考えますか？（複数回答可）

#### 5.4 調査対象者の属性

本アンケートでは、全国の大学に通う学生 137 名を対象に、AI 技術および AI ガバナンスに関する認識や意識についてアンケート調査を実施した。回答者の性別の比率は男性約 64.2%に対し、女性約 35.8%と、男女に一定の偏りが見られた。また専攻分野は 9 割強が文系の学生であった。学年は 2 年生から 4 年生まで幅広く分布しており、また一部には院生や社会人も含まれており、特に学部 3 年生（36.5%）と学部 2 年生（33.6%）が多くを占めた。

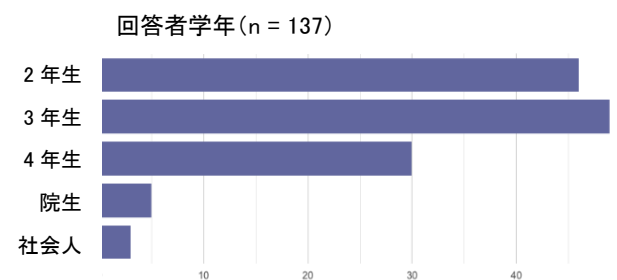


図 1. 回答者学年

次章では、アンケート結果の詳細な分析を行い、学生の AI ガバナンスに対する認識や意識、AI 技術の活用状況についての結果を示す。また、その結果から導き出される傾向や重要な発見について考察する。

#### 5.5 アンケート結果の分析

本章では、学生を対象としたアンケート調査の結果を詳細に分析する。アンケート項目ごとに回答を整理し、統計的な分析を行った。以下に、主要な結果とその考察を示す。

#### [AI の認識と利用状況]

学生の AI 技術に対する認識と利用状況につい

て、以下のような結果が得られた。

#### - AI の利用状況

回答者 137 名に対し、AI 技術の使用頻度を尋ねた結果は以下の通りである。

#### 利用頻度（票数降順）

- 週に 1～2 回: 27.7% (38 票)
- たまに使う: 24.8% (34 票)
- 使わない: 19.7% (27 票)
- 週に 3～4 回: 16.1% (22 票)
- ほぼ毎日: 9.5% (13 票)
- 月に 1～2 回程度: 2.2% (3 票)

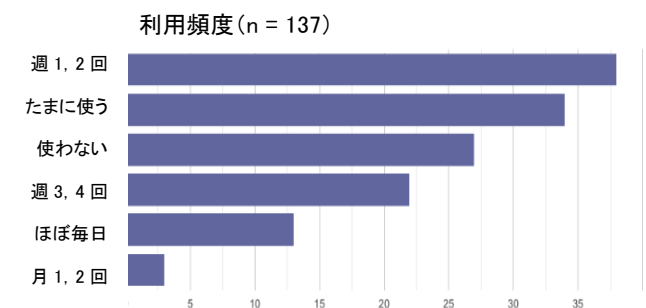


図 2. 利用頻度

アンケート結果から、大学生の多くが定期的に AI 技術を利用していることが明らかになった。特に「週に 1～2 回」使用する学生が 27.7%と最も多く、続いて「たまに使う」と回答した学生が 24.8%であった。これにより、過半数の学生が週に 1 回以上 AI 技術を活用していることがわかる。また、「使わない」と回答した学生が 19.7%いる一方で、「ほぼ毎日」使用する学生も 9.5%存在する。このことから、AI 技術の利用頻度には個人差が大きいことが伺える。「週に 3～4 回」使用する学生は 16.1%であり、「月に 1～2 回程度」使用する学生はわずか 2.2%に過ぎない。これらのデータから、多くの学生が一定の頻度で AI 技術を利用しているものの、頻繁に使用する学生とほとんど使用しない学生の二極化が進んでいることが示唆される。

うち AI を使わない学生 27 名に対してなぜ AI を使わないのかを尋ねた結果は以下の通りである。

#### [なぜ AI を使わないのか？（票数降順）]

- AI に対して信頼がない: 31.3% (20 票)
- セキュリティ問題: 29.7% (19 票)
- 必要性を感じない: 26.6% (17 票)
- プライバシー保護: 10.9% (7 票)
- 知識がないため、どう使用していいかわからない: 1.6% (1 票)

アンケート結果から、「AI に対して信頼がない」、「セキュリティ問題」、「プライバシー保護」といった、信頼性に関する理由が多く、AI の透明性が重要であると考えます。

#### [AI 技術に対する認識]

回答者 137 名に対し、AI 技術に対する認識を尋ねた結果は以下の通りである。

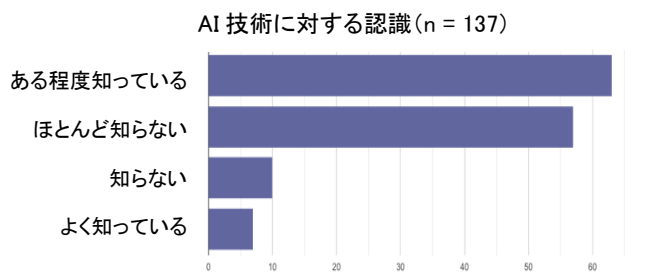


図3. AI 技術に対する認識

#### [AI 技術に対する認識 (票数降順)]

- ある程度知っている: 46.0% (63 票)
- ほとんど知らない: 41.6% (57 票)
- 知らない: 7.3% (10 票)
- よく知っている: 5.1% (7 票)

全体の 51.1% が AI 技術に対して「よく知っている」または「ある程度知っている」と回答した。一方で、48.9% は「ほとんど知らない」または「全く知らない」と回答しており、認識のばらつきが見られた。

#### [AI ツールやサービスの利用経験]

学生の AI ツールやサービスの利用経験について、以下のような結果が得られた。

#### [使用している AI ツール (複数回答可、票数降順)]

- 文章系生成 AI(ChatGPT など): 44.3% (54 票)
- 翻訳ツール (DeepL など): 41.0% (50 票)
- 音声アシスタント (Alexa など): 6.6% (8 票)
- その他: 4.9% (Python, 競馬, 法律, プログラミング, 壁打ち, LINE AI アシスト, 画像生成 各 0.8%)

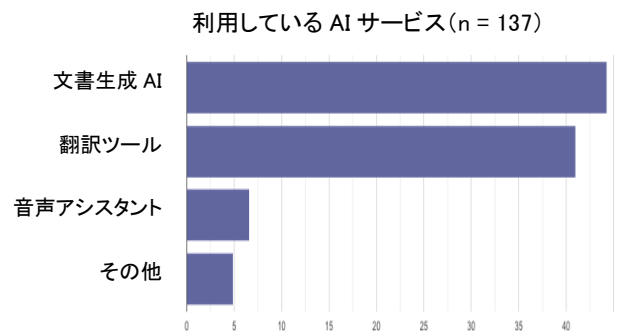


図4. 利用している AI サービス

アンケート結果から、多くの学生が文章系生成 AI (ChatGPT など) や翻訳ツール (DeepL など) を利用していることがわかる。特に、文章系生成 AI の利用が最も多く、44.3% の学生が利用している。翻訳ツールも 41.0% の学生が利用しており、これらのツールが学習や日常生活に広く使われていることが示唆される。音声アシスタント (Alexa など) の利用も一定数見られ、6.6% の学生が利用している。また、メディア生成 AI (StableDiffusion など) も 3.3% の学生が利用している。その他のツールの利用は少数であり、4.9% の学生が Python、競馬、法律、プログラミング、壁打ち、LINE AI アシスト画像生成などを各 0.8% ずつ利用していることが分かる。

#### [AI ガバナンス]

学生の AI ガバナンスに対する認識と意識について、以下のような結果が得られた。

#### [AI ガバナンスという概念の認識度 (票数降順)]

- ほとんど知らない: 46.7% (64 票)
- 知らない: 33.6% (46 票)

- ある程度知っている: 15.3% (21 票)
- 知っている: 4.4% (6 票)

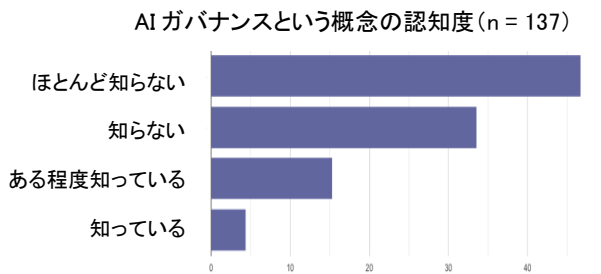


図5. AI ガバナンスという概念の認知度

アンケート結果から、学生の大多数が AI ガバナンスの概念を十分に認識していないことが明らかになった。全体の約 80%が「ほとんど知らない」または「知らない」と回答しており、認識度に大きな課題があることが示唆される。

[AI ガバナンスで重視すること (票数降順)]

- プライバシー保護: 26.4% (86 票)
- セキュリティ問題: 23.0% (75 票)
- 技術の安定性: 16.7% (54 票)
- 社会的な信頼性を高める: 14.4% (47 票)
- 責任の明確化: 10.1% (33 票)
- 公平性の確保: 7.7% (25 票)
- その他: 2% (6 票)

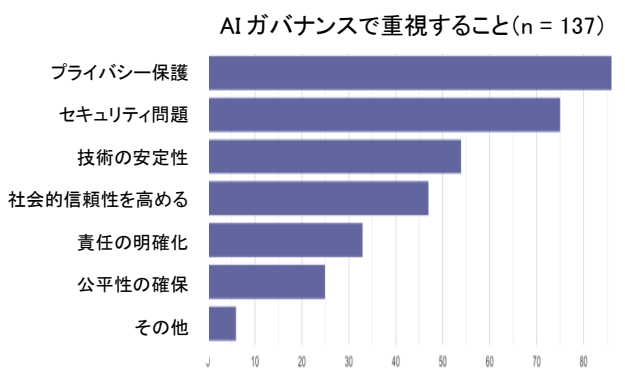


図6. AI ガバナンスで重視すること

学生が AI ガバナンスで重視する点として、プライバシー保護とセキュリティ問題が上位を占めている。また、技術の安定性や社会的な信頼性の向上も重要視されていることがわかる。

[AI ガバナンスの取り組みを強化するために必要だと思う取り組み (票数降順)]

- 法整備や規制: 38.1% (101 票)
- 教育や啓蒙活動: 26.0% (69 票)
- AI 企業の透明性向上: 17.0% (45 票)
- 国際協力: 17.0% (45 票)
- その他: 1.9% (5 票)

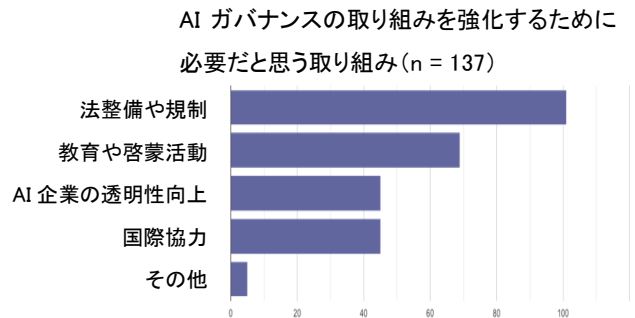


図7. AI ガバナンスの取り組みを強化するために必要だと思う取り組み

アンケート結果から、学生の多くが AI ガバナンスに関する法整備や規制の強化が必要と考えていることがわかる。また、教育や啓蒙活動の重要性も高く評価されており、AI 企業の透明性の国際協力も一定の支持を得ている。

[AI の活用]

学生の AI 技術の活用状況について、以下のような結果が得られた。

[AI 技術が日常生活に与える影響についての認識]

- 良いと思う: 54.0% (74 票)
- どちらでもない: 24.8% (34 票)
- 非常に良いと思う: 17.5% (24 票)
- 良くないと思う: 2.9% (4 票)
- 非常に良くないと思う: 0.7% (1 票)

アンケート結果から、学生の大多数が AI 技術が日常生活に良い影響を与えていると感じていることがわかる。特に「良いと思う」と回答した学生が 54.0%、次いで「非常に良いと思う」と回答した学生が 17.5%であった。一方で、「良くない」と



思う」または「非常に良くないと思う」と回答した学生は少数であり、全体の 3.6%にとどまっている。

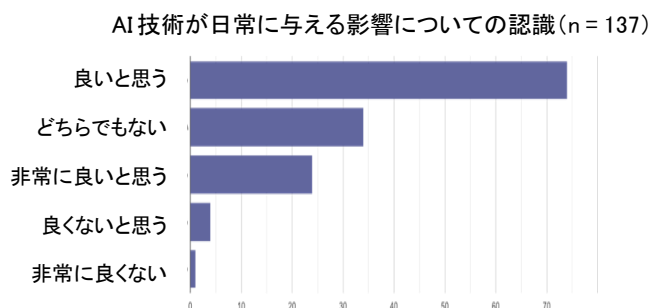


図8. AI 技術が日常に与える影響についての認識

これらの結果から、学生は AI 技術が日常生活にポジティブな影響を与えていると認識しており、AI 技術の活用に対して前向きな姿勢を持っていることが示唆される。

次章では、アンケート結果を基にした AI ガバナンスの現状と課題の詳細な考察を行い、学生の認識に基づく今後の AI ガバナンスの方向性や必要な取り組みについて議論する。

## 5.6 AI ガバナンスの現状と課題

アンケート結果から明らかになったのは、学生の間で AI 技術への関心や利用経験は高い一方で、AI ガバナンスに対する認識はまだ十分でないという現状である。具体的には、文章生成 AI、翻訳ツール、音声アシスタントなどの AI 技術を多数の学生が日常的に利用しており、その利便性を実感している。しかしながら、AI ガバナンスに関しては約 6 割の学生が「ほとんど知らない」または「全く知らない」と回答している。このギャップは、AI 技術が急速に普及する中で、ガバナンスに関する教育や啓発活動が追いついていないことを表している。AI ガバナンスの重要な課題として、以下の点が挙げられる。

### [プライバシー保護]

多くの学生がプライバシーの侵害を懸念しており、AI 技術の利用においてプライバシー保護の確保が求められている。これは、AI システムが大量の個人データを扱うことから生じる課題である。

### [データの透明性]

データの透明性が確保されていないと、AI システムの判断や結果に対する信頼性が損なわれる。透明性を確保するためには、データの収集、処理、利用に関する詳細な情報提供が必要である。

### [バイアスの除去]

AI アルゴリズムにバイアスが含まれている場合、不公平な結果を生じる可能性がある。アンケート結果でもバイアスに対する懸念が示されており、アルゴリズムの公正性を確保する取り組みが重要である。

### [責任の明確化]

AI システムが誤った判断を下した場合、誰が責任を負うのかが曖昧であると、問題解決が困難になる。責任の所在を明確にするためのガイドラインや規範の整備が必要である。学生のアンケート結果に基づき、今後の AI ガバナンスの方向性や必要な取り組みとして以下の点が挙げられる。

### [教育と啓発の強化]

AI ガバナンスに関する教育を強化し、学生に対して AI 技術の利用に伴う倫理的、法的な課題を理解させることが重要である。具体的には、大学のカリキュラムに AI ガバナンスに関する科目を導入し、講義やセミナーを通じて知識を深める機会を提供することが考えられる。

### [ガイドラインと規範の整備]

AI 技術の利用に関する具体的なガイドラインや規範を整備し、透明性、説明責任、倫理性を確保するための基準を明確にすることが必要である。これにより、AI システムの開発者や運用者が遵守すべきルールが明確になり、公正な利用が促進される。

### [国際的な協調の推進]

AI 技術はグローバルに利用されるため、国際的な協調が不可欠である。各国が共通の基準を持ち、協力して AI ガバナンスに取り組むことで、グローバルな問題に対処することができる。国際機関や多国間の協定を通じて、共通のガイドラインや規範を策定することが求められる。

### [技術的な取り組みの強化]

バイアスの除去やデータの透明性確保のために、技術的な取り組みを強化することが必要である。

例えば、AI アルゴリズムの公平性を検証するためのツールや技術を開発し、定期的な監査を実施することが考えられる。以上の取り組みを通じて、AI 技術の健全な発展と社会的受容を促進することができる。本研究の結果は、AI ガバナンスの重要性を再確認し、今後の実践的な取り組みの方向性を示唆するものである。

## 6 結論

本研究では、AI ガバナンスとその活用に関する現状と課題を明らかにするため、学生を対象としたアンケート調査を実施し、その結果を基に考察を行った。以下に、本研究の主要な発見と今後の方向性をまとめる。

### 6.1 主要な発見

[AI 技術の認識と利用]

多くの学生が AI 技術に対して高い関心を持ち、日常生活や学習で積極的に AI ツールを活用している。一方で、AI ガバナンスに関する認識や理解は十分ではなく、教育の強化が求められる。

[AI ガバナンスの課題]

プライバシー保護、データの透明性、バイアスの除去、責任の明確化が重要な課題として認識されている。AI 技術の利用拡大に伴い、これらの課題への対応が急務となっている。

### 6.2 今後の方向性

[教育と啓発]

AI ガバナンスに関する教育を強化し、学生に対して AI 技術の利用に伴う倫理的・法的な課題を理解させることが重要である。大学のカリキュラムに AI ガバナンスに関する科目を導入し、セミナーやワークショップを通じて知識を深める機会を提供することが求められる。

[ガイドラインと規範の整備]

AI 技術の利用に関する具体的なガイドラインや規範を整備し、透明性、説明責任、倫理性を確保するための基準を明確にする。これにより、AI システムの開発者や運用者が遵守すべきルールが明確になり、公正な利用が促進される。

[国際的な協調]

AI 技術はグローバルに利用されるため、国際的な協調が不可欠である。各国が共通の基準を持ち、

協力して AI ガバナンスに取り組むことで、グローバルな問題に対処することができる。国際機関や多国間の協定を通じて、共通のガイドラインや規範を策定することが求められる。

[技術的な取り組み]

バイアスの除去やデータの透明性確保のために、技術的な取り組みを強化することが必要である。

AI アルゴリズムの公平性を検証するためのツールや技術を開発し、定期的な監査を実施することが考えられる。

### 6.3 結び

本研究は、AI ガバナンスの重要性を再確認し、今後の具体的な取り組みの方向性を示すものである。AI 技術の健全な発展と社会的受容を促進するために、継続的な教育、規範整備、国際協調、技術的な改善が不可欠であることが明らかになった。今後の研究では、より詳細なデータ収集と分析を通じて、具体的なガバナンスモデルの構築や実践的なガイドラインの策定を目指していく必要がある。

## 参考文献

- [1] 富士フイルム, 「REILI - AI 診断支援システム」  
<https://reili.fujifilm.com/about/>,
- [2] リクルート「学校向け『スタディサプリ』で AI 搭載・アダプティブ学習機能の提供開始」,  
[https://www.recruit.co.jp/newsroom/pressrelease/2023/0310\\_12096.html](https://www.recruit.co.jp/newsroom/pressrelease/2023/0310_12096.html)
- [3] 第一生命経済研究所「レポート採点 AI の可能性」  
<https://www.dlri.co.jp/report/ld/324880.html>
- [4] KPMG 「AI 時代のプライバシー：プライバシーで AI の信頼を築くには」  
<https://kpmg.com/jp/ja/home/insights/2023/10/cyber-privacy-ai.html>
- [5] 福地 一斗「機械学習アルゴリズムに潜む 不公平なバイアスとその理論」筑波大学 理研 AIP  
<https://www.ieice.org/~sita/forum/article/2022/202212191121.pdf>



- [6] 日本損害保険協会「自動運転の法的課題について」  
[https://www.sonpo.or.jp/news/release/2016/ctuevu000000195g-att/jidou\\_houkoku.pdf](https://www.sonpo.or.jp/news/release/2016/ctuevu000000195g-att/jidou_houkoku.pdf)
- [7] 個人情報保護委員会「令和3年 改正個人情報保護法について」  
<https://www.ppc.go.jp/personalinfo/minaoshi/>
- [8] 経済産業省「AI ガバナンス」  
[https://www.meti.go.jp/policy/it\\_policy/ai-governance/index.html](https://www.meti.go.jp/policy/it_policy/ai-governance/index.html)
- [9] SoftBank 「ソフトバンク AI 倫理ポリシー」  
<https://www.softbank.jp/corp/aboutus/governance/ai-ethics/>
- [10] European Union 「Complete guide to GDPR compliance」 <https://gdpr.eu/>
- [11] Harvard Business Review, 「October 13, 2022」  
<https://hbr.org/2022/10/where-ai-can-and-cant-help-talent-management>
- [12] MDPI, 「The Challenges of Teaching and Assessing Technical Translation in an Era of Neural Machine Translation」  
<https://www.mdpi.com/2227-7102/13/6/541>